

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA

COLLEGE REPORT

第16号

〈OCTOBER 1998〉

発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP **この三年の夏休み**

夏期短期留学レポート／教育実習報告

私が大学院に進学した理由／韓国東国大学校日本語講座

第二回「同窓会総会」のご案内／オープンキャンパス

「1998年度保護者との就職懇談会」／1999年度入試日程



航空写真は、以前自衛隊のご厚意で撮影したものがありませんでしたが、昨年体育館等の新増築を行ったため、開学以来初めて業者に発注して撮影したのが下の写真です。

写真左下手が進入路、上には国道7号線新新バイパスが走っています。グラウンドとテニスコートの間にある大きな建物が新築したパーム館(体育館)、小さい緑の屋根がある建物が増築したニューエル館(講義棟)です。

校舎の右手のテニスコート5面も昨年完成いたしました。これで、テニスコート側(新発田市側)は空き地はなくなり、校地を広げるには、聖籠町側(校舎の前面及び左上)の農地を残すのみにになりました。



もくじ

この三年の夏休み 柴沼晶子……………1	「1998年度保護者との就職懇談会」報告…10
夏期短期留学レポート 下谷春正・茂野久美子 4	おつかれさまでした 菊地次郎さん・富所恵利子さん…11
私が大学院に進学した理由	オープンキャンバスを終えて 西村秀雄……………12
一大学生活の中で得たものとは―金子美由紀…6	学事予告……………12
韓国東国大学校日本語講座報告……………7	寄付者ご芳名……………12
ゼミ紹介 田原嗣郎……………7	前号以降の報告……………12
教育実習レポート 村松裕子・矢部絵梨……………8	1999年度入学試験日程……………13
第二回「同窓会総会」のご案内……………9	
クラブ紹介 男子バスケットボール部 岡田功太郎…9	

この三年の夏休み

教授 柴 沼 晶 子



◆国際道徳教育学会

八月九日から十四日までウェールズのカーマセンにあるトリニティー・カレッジで行われた国際宗教・価値教育セミナーに参加した。昨年は九月三日から六日までアイルランドのダブリン近郊にある国立メヌス大学で開かれた国際教育史学会に参加し、一昨年は七月下旬ランカスターのセント・マーティン・カレッジで行われた「道徳教育」誌二十五周年を記念した国際道徳教育学会に出席したので、三年連続で国際学会で学ぶ機会を与えられ、得るところが大きかった。これら旅で得たものをゆっくりと反芻することなく過ごしてしまっているので、今年後半は資料の整理をして何らかの形に纏めたいと思っている。まずこの三年の夏休みの旅のメモを紙面を借りて記させていだこう。

◆国際道徳教育学会

一昨年の「道徳教育学会」は、*Journal of Moral Education (JME)* の発刊二十五周年記念大会であるから、厳密な意味での国際学会とはいえないかも知れない。これに出席した経緯は、一九九五年八月に千葉のモラロジー研究所で行われた第二回道徳教育国際会議に出席した際、同誌の編集長モニカ・テラーさんの誘いがあったからである。テラーさんとはその八年前に同研究所で行われた第一回道徳教育国際会議以来親交を重ねていたこともあって、彼女の主催する学会に出席したい気持ちもあったが、宗教教育とは別の形で一九六〇年代英国に道徳教育の研究が高まってきた流れのなかで同誌が創刊され、当時の道徳教育プロジェクトは日本でも注目されたので、その流れが以降どのように展開されてきているのかを確かめておきたかったからである。学会のテーマは「来る千年(the Millennium)における道徳教育」であった。参加者は英国だけでなく、北米、カナダ、ヨーロッパ各国、中近東などの地域の道徳教育学会員などで、日本の国際会議でおなじみの顔も多かった。

この学会での最大の収穫は、学校カリキュラム評価機構(SCAA)が推進していた

価値教育に関する全国フォーラムについての報告であった。この資料は帰国後改めて英国の宗教・人格教育に関する科研費研究分担者であった文理情報短期大学の新井浅浩さんとタイムズの教育版を巡り、このフォーラムの発足にあたっての同機構の所長ニック・テートの演説に対する反応やその後の価値観に関する世論調査などを追跡し、それらを資料集の形で印刷して紹介することができた。

◆国際教育史学会

一九九七年の国際教育史学会第十九回大会は「信仰と国家」がテーマであった。その前年の日英教育フォーラム(早稲田大学の鈴木慎一教授を中心に一九九一年発足した英国教育関係の小規模な学会)に來日されたロンドン大学のオードリッチ教授が参加を呼びかけられたものだった。

大会では各国の教育史上の宗教に関する問題や、宗派の歴史にまたがる教育活動が各セッションで取り上げられ、現在の私には遠いものになってしまっていた西洋教育史への関心を呼び覚まされた。「コメニウスにおける信仰と教育」を発表された井ノ口淳三教授(追手門学院大学)によると、発表者は二ヶ月前に発表原稿の全文を提出することになっていたので、各発表のコープが用意されており、内容理解に便利であった。前年の道徳教育学会はそのようなものはおろか、発表要旨もなく、議論が哲学的な難解なものであると、内容をフォローするのが大変であった。

国際学会では国内の通常の学会よりも日数が長く、日本からの参加者ともゆっく

CLOSE UP

お話でき、お近づきになれる機会でもある。ランカスターの道徳教育学会では美しい花が咲き乱れるキャンパスで、岩佐信道教授（麗沢大学）から、直接教えを受けられたコールバークにまつわる哀悼をこめられた思い出話を伺うことができた。

教育史学会では井ノ口教授の訳されたコメニウスの『世界図絵』に対する学生の反応や、教職課程での西洋教育史の扱い方法などについてお話しした。

浪本勝年教授（立正大学）は学会終了後SCAAのニック・テートと面談のご予定と伺い、昨年のフォーラムの価値教育に関する政府への提言がその後どのように扱われているかを確かめて欲しいとお願ひした。帰国後間もなく分厚い資料を送っていただき、フォーラムの提言が学校レベルで試行され、二〇〇〇年のカリキュラムの改訂に影響を与えるとの情報を得たことは今後の研究の見通しを立てる上で参考になり、有り難かった。その後も同教授からはSCAA—現在ではQCAA—の資料を送って頂いており、ご好意に甘えて科研の資料集に収録したニック・テートの演説の和訳を同氏に届けていただいたりもした。

◆宗教・価値教育国際セミナー

さて最後に今年のセミナーである。話は今から十五年前に遡る。

ある日、現在英国宗教教育誌（*British Journal of Religious Education*）の編集長であるロバート・ジャクソン（ウオーリック大学）教授から一通の手紙を受け取った。それにはバーミンガム大学のジョン・ハル博士らの提唱による「ISREV: International Seminar on Religious Education and Values」が組織され、現在大西洋岸の国々の宗教教育に関心を持つ研究者が中心になっ

てはいるが、オーストラリアや南アフリカの参加者も含めて一七ヶ国から一〇〇人の会員を擁していること、または公私の教育の場での宗教教育、道徳教育、価値、人格形成などの発展に貢献するようこれらの分野の研究を促進し、また各国の研究者の相互理解と友情を深めることを目的としていること、などが説明されていた。さらに「セミナーは一九七八年のバーミンガムでの開催を皮切りに二年毎に開かれ、一九八六年にはアイルランドのダブリンで開催の予定である。ところで組織委員会はいまやこのセミナーにアジアや中近東、南米などの国々の宗教教育学者の参加を求める時がきたと思っている。ついてはこの会の活動を高めるようなこの分野の学者の名前を教えてください。」ということであった。

委員会としては、（a）研究実績や著書のある宗教または道徳教育の専門家であること、（b）同様に研究実績のある宗教学または神学が専門で特に教育に関心のある学者で、所属の宗教やその有無は問わないことが記されていた。

ところで何故このような大役を仰せつかることになったのだろうか。そもそも私のような者のところへ、組織委員会からこのような公式の手紙が届いたのだろうか。ジャクソン氏は当時英国の宗教教育界で優勢になっていた、世界の諸宗教を学習させることを推進する、いわゆる現象学的アプローチの立場にある若手の学者であることは知ってはいたものの、一面識もない方である。この謎は「リチャード・チームズから名前を聞き、日本大使館で住所を教わりました」という手書きの追伸で水解決した。

さらにその数年前のことである。当時文部省に勤務していた夫が国際交流基金で英国から来日中の教育関係者に日本の教育制度などを説明した際に、次々と質問が出て、

続きはわが家ということになったらしい。夕食後ではあったが、狭い公務員宿舎に十数人の方達をお迎えして教育談議が沸騰したことがあった。グループの方達にとっても交流の機会となり、また個人的要望も出されたようだ。そのとき「宗教教育について何方か彼女に教えてくれないか」という夫の声に名乗り出てくださったのがロンドン大学のアジア・アフリカ研究所のチームズ氏であった。

私は学校を出た直後、日本大学の教育制度研究所にお世話になったが、そこで所長であられた日本教育史の泰斗石川謙先生に、英国の宗教教育について調べるようにと指示された。修士論文で英国の詩人でもあり、非国教派の学校の勅任視学官であったマシュー・アーノルドの教育思想を扱って、英国の公教育制度の樹立に至るまでの一世紀にわたる「宗教的困難」をいやというほど思い知らされていたので、歴史的背景からもこのテーマは非常に魅力のあるものであった。その後コッツ、といえは聞こえはよいが、ほそぼそと日本では先行研究もあまりない英国の公立学校の宗教教育を追いかけていたのである。

チームズ氏にはその夜いろいろいと宗教教育の実際を伺い、その後も研究情報をしらばし送っていた。ISREVの依頼に応じて何人かの先生方のお名前を送ったことに対して、ハル博士からダブリンの大会へゲストとして招待状を頂いた。だが残念ながら諸般の事情からダブリン行きを断念せざるをえなかった。その大会に招待状が送られた先生方もなたも出席されなかつたが、その後松川成夫教授（当時東京女子大学）がバーミンガム大学教授（当時研究で滞りなされ、セミナーにも出席されるようになった。以後岩村牧師（大森めぐみ教会）や吉岡さん（東洋英和女学院大学）

会員になられ、今年の理事会で朴さん（東京神学大学）も会員になられるようである。日本キリスト教会のニューズレターにも会の研究動向が紹介されるようになった。

そして昨年、松川先生から今年のウェールズでの大会への出席のお誘いを受けた。ハル博士への紹介状をお送りくださり、無事大会への準会員としての招待状を頂いた。会員になるには二回の研究報告をした後、理事会で協議され、認められるとのことである。これまでもずっと松川先生より大会のご案内は頂いていたものの、とても出席して報告するようなことはできな思っていた。日本国内でこそ英国の宗教教育について外国の教育事情の紹介のようなことで報告はできるものの、（それとて研究とは言えない）まして英国の宗教教育について当の専門家の前で何がしかを述べても意味がない。しかしウェールズでの今回のセミナーにはどうしても出席したかった。テーマが「来る千年におけるThe 4R」であり、トピックの領域に「公教育」が含まれていたからである。The 4Rとは読み、書き、算数の3Rs (reading, writing, arith, metric) つまり教育の基礎的領域に宗教を第四のRとして位置付けたものである。この第四のRという概念は宗教教育をある特定の信仰に導くためのものではない、人間としての全面的発達を目指す一般教育の原理に基づく宗教教育を意味している。英国の学校におけるこのような宗教教育の位置付けの論理は、私のそれまでの歴史的背景や比較教育的考察の対象としての興味を、教育のなかに宗教をどのように位置付けるかという問題意識へと転換させた。また日本の教育のあり方、特に道徳教育の問題点や課題が宗教的次元への掘り下げの欠如にあると痛感させられるようになっていた。

というわけで、今回のセミナーでは「日

本の公立学校の道徳教育における宗教的次元の教育」としてその問題点と可能性について報告した。この問題には最近学会でも関心が示されており、幸運にも六月には日本教育学会の関西支部の「宗教と教育」というシンポジウムの二年目の「政教分離と公立学校における宗教教育」と題するシンポジウムで英国を事例として提言するため、この問題に向き合う機会を与えられていた。六月の学生の教育実習指導が終わってぎりぎりまで原稿を書き上げ、同僚のウィリアムズ先生に英語を直していただいたのは（敬和はこの点は心強いかぎりである）夏休み直前であった。幸いレスポンダント、ルーズモア氏が非常に好意的なコメントと質問によって私の拙い報告を補足してくださり、無事十数年来の宿題を果たすことができた。しかも元勳任視学官の氏が手がけられた、いまや人手不可能な歴史的文書であるウエスト・ライディングの宗教教育協定細目 West Riding Agreed syllabus（一九六六年）をお送りくださるといふ感激も加わって。

◆出会いと再会

人生では常に一つの出会いが多く多くの出会いに発展する。ISREVではこれまでその著作で存じ上げていた方々と直接お話しでき、さらに多くの研究者との出会いがあった。しかし最大の出来事はハル博士との邂逅であった。ある日食卓で一緒にになった。ご令息のトム君も。博士は全く目がお見えにならない。「隣は誰ですか」「AKIKO Oです」「おおアキコ、ゆっくり話できて嬉しい。」既にご挨拶は済ませていたがこの時ゆつくり博士とお話する機会に恵まれた。「松川先生が訳された『Touching the Rock』光りと闇を越えて―失明につ

いての一つの体験』のお子さま達との会話に感動しました。」「あのことをトムは全然覚えていないのです。」「あの本の紹介を日本キリスト教会誌に書きました。」「シゲオの学会ですね。」「ええ、今年は岩村牧師の幼稚園で大会が開かれましたが来年は私どもの敬和カレッジの主催です。」「著書だけでなく、『英国の宗教教育』の編集長としての活躍も拝読していました。」「Learning for Living（同誌の前身一九六一―七八年）も購読していました。その前の Religion in Education も何冊か持っています。私がどんなに年を取っているかお分かりになるでしょうか?」「私は女性の年を聞いたりはしませんよ。」「最後に二〇〇〇年のエルサレムの大会に出席できるよう努力することをお約束した。

感激の再会もあった。昨年ダブリンでは中学校時代英語をお習いしたシスターを修道院にお訪ねした。今年はロンドンの南にラフリーズ博士の夫人をお訪ねした。ロンドン大学の比較教育学教授であった故博士と亡き父はともに世界比較教育学会を設立した親友であった。車を運転してくださいました新井さんの旧知のブラッドベリー夫人は私たちの学習指導要領の英訳でお世話になった元高校長である。「キングス カレッジのエドモンド・キングをご存じでしょうか? 私の夫は彼と大学同期の親友で私たちは明日会うことになっているのですよ。狭い世の中ですこと。」：設立二十五周年記念にオハイオのセント大学に作られた文書館に学会創設当時のこれらの方々との往復書簡を送る約束をしていることをご報告して、十三世紀に建てられたひっそりとした教会に隣接する老人ホームを辞した。



夏期短期留学レポート

夏期短期

海外留学を終えて

英語英米文学科三年 下谷 春正

私は、この夏、アメリカ・アイオワ州のノースウェスタン大学に短期留学しました。私にとって、初めての経験であり、大きな経験を得た五週間でした。

ノースウェスタン大学では、聖書と英語の勉強をしてきましたが、それよりも、もっと大切な勉強をしてきた、と感じています。それは、今まで日本人としか接してこなかった私が、他の国の人間と交流をもち、他の国の状況や文化などを生の声でふれてきたことです。

私は五週間、大学の寮で、私を含め、三人で生活をともにしていました。そこで、私のルームメイトを紹介します。まず、一人は、アメリカ人で、名前は「Nathan Lamb」といい、年齢は二十一歳で、私と同じぐらいの年齢でした。彼は、将来、牧師になるのが夢である、と私に話してくれました。彼に対する印象は、すごく真面目な性格だが、私が描いていたアメリカ人らしい気さくな所もあり、言葉の壁が多少あったにせよ、いい関係が保てたと感じています。彼の言葉で印象に残っている言葉があります。その言葉は、私が日本に帰る前日

に言ってくれました。

“I invite you to return to our college anytime that you can come back to America.”

多分、この様な言葉だったと思います。私は、この言葉をいつも、心のどこかに留めて、いつか、もう一度、アメリカに行こうと決心した言葉でした。

もう一人は、パレスチナ人で、名前は、「Muhammad Wasfi Kafri」といい、年齢は十七歳で、私より三歳も年下でしたが、彼ともいい関係が保てたと感じています。

クラスメートとランチタイム



彼は、将来教授になるのが夢で、ノースウェスタン大学で四年間、生化学の勉強をする、と私に話してくれました。彼に対する印象は、陽気な性格でいつも、ジョークを言ったりして私を楽しませてくれました。しかし、勉強に取り組む姿勢は、人一倍あり、私も良い刺激を受け、勉強により一層、取り組むことができました。彼との思い出は数えきれないほどありますが、特に、私が、印象深かった話があります。それは、彼の母国、パレスチナのことです。彼は、私に、パレスチナについて、次のように話してくれました。「私の国は、アメリカに対して、あまり良い印象を持っていない。なぜなら、アメリカは私達を奴隷の様に扱ってきた。アメリカは、私達の要求を受け入れてくれない。私自身も、アメリカに対して、良い印象を持っていない。けれども、私はアメリカに留学した。イギリスにも行くことができたかもしれない。それなら、なぜ、アメリカに来たのか？理由は、金銭的な面もあるけれど、なによりも、アメリカの人々、文化にふれて、本当のアメリカをふれてみたかった。」

私は、この話を聞いた時、本当にこの人は目的を持って、留学にきている、はたして、私には、そこまでの目的意識があるのか、と感じました。とにかく、彼とは、留学中、一番の友達でしたし、一番、私にとって、得るものが多かった人物でした。

私にとって、ノースウェスタン大学での夏期短期海外留学は、大きな経験を得た五週間であり、かけがえのない思い出になりました。今、思い出してみても、あの五週間は、まるで夢を見ていた様な出来事でした。

カリフォルニアで 学んだこと

英語英米文学科二年 茂野久美子

私達十一名はこの夏カリフォルニアで多くのことを学びました。それらは、合わせて五回の週末旅行やカリフォルニア州立大学サンバナーディーノ校での授業、そして毎日のホストファミリーとの生活の中で得ることができた貴重な体験でした。

私達は、週末旅行でディズニールランド、シーワールド、グランドキャニオンそして、ユニバーサルスタジオへ行ってきました。ディズニールランドでは、娯楽に対してアメリカ人は徹底していると思いました。シーワールド、ユニバーサルスタジオも同様だったので、外装やアトラクションはもちろん、人を楽しませるための技術やアイデアは、日本人の感性とはまた違う、解放感に満ちた素晴らしいものでした。それでいて身体障害者への暖かい心配りも文化の一つになっているようで、順番を譲ったり、アトラクションに乗るために手を貸すなどという行動もごく自然に行われていました。これらのことから、私はアメリカ人の自由で明るく、暖かい精神を知りました。

大学での授業や生活は何もかもが新鮮でした。広島から短期留学に来ている学生や、ブラジル、韓国、台湾などからの若い学生との交流から世界の広さを感じ、改めて英語を学ぶことの難しさを実感しました。先生方も個性的な人達ばかりで、熱心に教えて下さいました。私が授業を通して気づい

た自分の弱点は読むことです。それを打ち破るには、やはり多くの本を読むこと以外に方法はないと先生はおっしゃっていました。実際、大学に長期留学している学生で、一週間に千ページも本を読んでいる人もいて、自分の今までの勉強は、自分の英語力を高めるものではなかった気がしました。留学生達は必ず将来に夢を持っていて、とても素敵だと思いました。

今回のカリフォルニアへの留学での一番の思い出は、ホストファミリーとの生活だと思えます。渡米する前の私がついていたイメージは、どの人も底抜けに明るく、細かいことを気にせずアバウトに毎日を過ごしているというものでした。しかし、今回の留学で私が知ったのは、アメリカ人も私達と同じ人間であり、私が思うような画一的な性格ではないということでした。実際に私がお世話になったホストファミリーは、お金にもしっかきりしているし、人に合わせて無理に明るく振る舞ったりすることはなかったように思えました。私が留学した一つの理由に、日本での毎日の同じ生活と自分が嫌で、それらを変えたいという思いがありました。前に持っていたイメージのアメリカに飛び込みたかったです。日本で楽しくないから、アメリカに楽しくしてみようという受身な考えが今思えば少なからずあった気がします。しかし、そんな考えでいては、どこに行っても楽しくはならないということに気づいた留学でした。他にも感じたことも多かったのですが、私が一番印象に残った思い出として、帰国する日の朝の出来事があります。心を開き、打ち解けることは難しいものです。私もそれ



先生を囲んで楽しい授業

がなかなかできませんでした。それは失敗を恐れるあまり、多く話しかけることができなかつたのが大きな理由でした。そのことを別れる前にホストファミリーに言ったことで、初めて心から打ち解けられた気がしました。つまり素直になることが大切なのです。そうすれば意外にも簡単に心が近づくのです。そして、それを伝えるための言葉も同じく大切です。だから勉強する必要があると痛感しました。

この一カ月の留学は辛いことも多かったけれど、過ぎてしまうと夢のようです。とても貴重な体験といっても過言でないと思います。そして、自分の中で大きいのは、一つは思い出、もう一つは関わった全ての人達への感謝の気持ちです。

私が大学院に進学した理由

—— 大学生活の中で得たものとは ——

清泉女子大学大学院 金子 美由紀

ある女優が言った次のような言葉がある。「東京には全てがある。だが、目的意識を持たぬ者にとっては得るものは何もない。」

例えばこの言葉にある「東京」を、「大学生生活」に置き換えてもよいだろう。結論から言ってしまうえば、全くその通りなのである。

私がある「目的」を持って、大学院進学を決意するに至ったのは、大学時代に或る日突然決まったというよりも、高校時代の「転校」を境に抱えこんだ「ある問題」にまで溯ってみることができた。

具体的な事柄を述べることは控えるが、転校を契機に、今まで皆と同じようにやってきたことがどうもできない、追いつけない、といったような、完全にその目に見えない流れから自分が取り残されてしまい、路頭に迷ってしまったのである。つまり、自分が何の為に勉強をしなければならぬのか、何故学校に行くのかが全く分からなくなってしまうのだ。

かといって、その時点で学校をやめる決心もつかなければ、やめた後に特別何かしたい目的も見つからなかったから、結局は何かイライラしながら学校に通っていたところがある日知人の一人から次のようなことを言われたのである。

「お前が今苦しんで、悩んで、どこかで何かいらいらしているのは、何かを探そうとして正しく物事を見ようとしているからだと思う。これが最善の手段かは判らないが、大学まで行ってみるべきではないだろ

うか。」

確かに、大学へ進学したところで得るものは何も無いかも知れなかったが、そう言われたのち数日考え込んで、結局大学進学を決めた。

敬和学園大学での四年間は、正直なところとても危険な「賭け」であった。しかし、大学四年間で何を得られるかという問題は、それは全てその大学に何が置いてあるかが問題なのではなく、自分が何の為に、どうしたいのかという目的意識を見つけたせいかどうかにかかっていたのである。

最初は、「求めよ、さらば与えられん」と言われても、何をそもそも求めたらよいのかさっぱり判らなかったが、大学二年生になって一大転機が訪れた。

この年、私は公私に於いて対人関係に苦しんだ。精神的孤独の状態に直面した中で、授業中に延原教授が話された言葉が全てを決めることになった。「人は、過去の栄光にすがって過去に生きるものでもなければ、未来にしがみついて生きるものでもなく、あくまでもここ（現実）において生きるのです。」という言葉である。

例え現在の状況がいくら苦しいものであろうと、そこから逃げられるものではない、すべてはここ（現在）から始まるのだ、という、全くごく当たり前のことに気付かされた。私が何を探し求めていたのかが判ったのである。私はただ、何の為に自分が生きているのかという意味を見つけただけだったのである。

それが目的意識になった日から、私は今まさに「哲学」が必要だと直観し、危険な賭けと覚悟した上で延原教授を信じて喰らいついていった。本腰を入れてやればやるほどに、大学だけでは時間が圧倒的に足りないと感じるようになり、これが結局大学院への進学を決意させた要因となった。

誰にでも言えることだが、目標が定まったからといって、その先に用意されていた道は決して生易しいものではなかった。だが、今一番やりたいことが決まってからは、確かに多くのものが与えられることになった。与えられるもの全てが良いものだけとは限らない。時には卑劣な中傷すら与えられた。

だが、与えられた中でも最大の幸福は、自分が背中を預けても決して揺るがない精神的支柱を得たことである。それは、数少ない「親友」の存在でもある。一人の希有な方である延原教授との出会いは、私に一大変革を促した。

以後、延原教授の御厚意から、進学先で多くの先生がたにも巡り合い、大変なことは勿論あるが充実した大学院生活を送っている。

しかし、ここまで来られたのも、ひとえに私を支えてくれた人々、そして理解を示してくれた家族のおかげである。

この場をお借りして、私を支えてくれた全ての人々に感謝の意を表したい。

金子美由紀さんは、一九九七年三月に本学の国際文化学科を卒業後、一年間、延原時行教授のもとで研究生として学ばれました。今年四月、清泉女子大学大学院人文科学部 研究科に進学され、現在在学中です。

（編集部）

韓国東国大学校 日本語講座報告

田原 嗣郎

七月二十一日から三十一日まで韓国東国大学校日本語講座が本学で開かれました。日語日文科の三・四年生二十名を対象に、二クラスで一日二コマ、九日間の短い講座でしたが、授業外で日本人と交流する機会も多く、聴く力・話す力の向上が見られました。また、文化の違いを相対化することも学んでくれたことが、最終日のスピーチからわかりました。二つご紹介します。

「最も印象に残ったのは、ホームステイの家で国際電話をかけたときのことです。お母さんが『韓国のご家族が心配して下さいますよ』と、電話をかけてもいいですよ』と言ってくれました。私は本当に申し訳な

いと思って、『どうもすみません。ありがとうございます』を連発しながら、電話をかけました。後でお母さんが電話料金を書いた紙をくれました。もちろん料金を払おうと思っていましたが、ちょっとびっくりして慌てました。

もらって当たり前のものをもらいたいと思っても言えないのが韓国人です。それに比べて日本人はそれを言えるのだと思います。自分の意思をはっきり伝える日本人に比べて、情に弱くてうやむやにするのが韓国人なのです。日本人のはっきりしている点は本当に見習わなければならぬと思いますが、厳しい人間関係になるのではないかと思います。

「今回初めて日本に来ました。この十日間で一番印象に残ったことの一つはお坊さんのことです。初めの日、私はお寺でホームステイをしました。お坊さんには奥さんや子供がいました。お酒を飲みます。タバコも吸います。カラオケにも行きます。韓国のお坊さんはこういうことを全然しませんから、私はびっくりしました。これは文化の違いだと思います。文化の違いは相対的な問題だと思えますから、日本のお坊さんを良くないとは思いません。文化の相対性を認めなければならぬと思います。私は日本に来てこういうことを直接体験して良かったと思います。これからは何でも一生懸命勉強しようと思います。」

日本語講師 伊藤 恵子

ゼミ紹介

「演習の計画」

日本国憲法は大日本帝国が戦争に敗北し、ポツダム宣言を受諾したという条件のもとでアメリカ占領軍の意図を受けて作られた。この憲法の内容はまた二十世紀半ばという歴史的な境位をも示す。その当時日本政府が準備した憲法草案と占領軍司令部が示したそれを比べてみれば、日本の支配層の脳髓内容が半世紀も一世紀も遅れたものだったことが歴然とするだろう。日本の支配層が一貫して日本国憲法に不快感を示してきたのはそのためである。本年度はこの憲法が示す世界的境位と日本の状態、および日本がおかれていた国際的関係を考えながら憲法の条文を読んでいく計画である。近代憲法の一つの特徴である自然権の思想、基本的人権を基調とするつもりであり、そのためまず教科書(2)を使用する。次に(1)・(3)を参考とし、日英の条文を熟読しつつ、憲法思想の歴史の展開のなかに各条項の意味を探り、受講学生のそれぞれがもつ関心を開発し、かつ凝結させて次年度における問題を決定する。その過程で必要となる多くの書籍・文献を読み、問題を明らかにすることが必要である。次年度では、学生各々の関心に従って日本国憲法の成立に関する問題や憲法が社会生活に関する現実的な問題を取扱う。材料を蒐集し、討論し、レポート・論文をまとめる。以上が演習の計画である。

開講当初における教科書は以下の三冊である。

- (1)樋口陽一・大須賀明『日本国憲法資料集』三省堂
- (2)井上ひさし・樋口陽一『日本国憲法』を読み直す』講談社文庫
- (3)長谷川正安『日本の憲法』岩波新書



教育実習を終えて

英語英米文学科四年 村松裕子

私は母校の中学校で二週間教育実習を行いました。他の教職の仲間より、自分だけ一週間は早かったので、とても不安でした。しかしその不安も校長先生の言葉で少し飛んでいきました。「私も教育実習にいったことを今でもよく覚えています。とても大切な思い出です。完璧に授業をするのではなく、楽しい授業をして下さい。失敗をおそれずに、いい思い出をつくって下さい。」この言葉を聞いて、私は失敗をおそれずに頑張ろうと思いました。

教壇実習は全学年でした。授業時間数も多く、指導案を書くのが大変でした。学校にいない間は授業や授業観察で指導案を書く時間がないので家で書く日が続きました。大学では一日に三つもの指導案を書いたことになったので、最初のうちは負けそうになりました。しかし、大学で習ったことや自分を信じて頑張りました。教科指導の先生はとても熱心に指導案を見てくださいました。とても厳しい先生でした。授業においても熱心に指導をしてくださったのでとても勉強になりました。特にクラスルーム・イングリッシュについて指導を受けました。最初のうちは授業中、ほとんど日本語でした。しかし先生に、「指示は全部英語で」と指導を受けました。私は英語で話すことは苦手だったけれど頑張りました。最後の授業までには、ほとんど英語が変わってしまいました。しかし、イントネーションが、日本人なので、これから、もっと勉強しなくてはいけないと思いました。

実習中、遠足や陸上大会などの行事もあり、生徒の違った一面も見ることができました。素直な生徒達にふれ、忘れていたことを思い出しました。自分も、もっと頑張らなくてはいけないと思いました。

二週間はあっという間に過ぎました。しかし、学んだことは計り知れません。机上では学ぶことのできない貴重な経験は、これからの私の土台になってゆくことでしょう。



▲教育実習のための事前指導
(妙高高原にて)

教育実習で得たもの

英語英米文学科四年 矢部絵梨

六月一日から十二日までの約二週間、私は母校の東新潟中学校で教育実習をさせていただきました。

私は一年生のクラス担当になったのですが、とても元気のいいクラスで、生徒たち、また先生方にも恵まれ、毎日学校へ行くのが楽しくて仕方ないという充実した実習となりました。

英語は一・二年生あわせて五クラス、道徳は担当のクラスを持ったのですが、事前に大学で模擬授業をしたり、教材研究などをしていたので、指導案を書く、準備をするといった点ではそれほど苦労をせずに済みました。

しかし実際教壇に立ってみると、生徒全員の視線が自分に集まるわけですから緊張せずにはいられません。初めは、汗をかきながらの必死の授業でした。

でも、一度そのクラスの雰囲気をつかむと、私自身も楽しみながら、不思議なほど自然に授業をすることができました。授業をしてみてもわかったことは、自分があたため、一生懸命準備した授業には生徒もついてくるということです。そして、「わかる」ということを前提として授業を構想すると良いものができるということです。

私は毎回授業後、アンケートをとり、できるだけ生徒の生の声を聞くようにしました。そうすると、黙って何も言わない生徒でも「楽しかった、分かりやすかった」と感じていることが分かり、次の授業への自信にもつながりました。なかには厳しい批判もありましたが、それは素直に受け止め、改善していきました。

また、机間巡視をしていてあちこちから質問攻めにあったとき、楽しそうに活動している生徒たちの顔を見たとき、教えることの喜び、楽しさを知り、このときほど教師っていいなと感じたことはありません。

二週間という短い期間でしたが、この実習で得たことは私の一生の宝物です。最後になりましたが、教職担当の先生方、実習でご指導頂いた先生、そして私を励ましてくれた生徒たちに感謝したいと思います。ありがとうございました。

第二回

「同窓会総会」のご案内

敬和学園大学の卒業生で構成される同窓会も今年で四年目を迎え、第二回の同窓会総会・懇親会を敬和祭開催に合わせて開催する運びとなりました。「卒業生の皆さん、これを期に懐かしい仲間会に、懐かしい母校をたずね、少し前の自分に戻ってみませんか？」

まだまだ社会に出て間も無い人がほとんどで大学の同窓会とはどんなものかなんな事しているところなかわからなと思います。この同窓会総会という催しも同窓会活動の一つです。同窓会を運営しているのは、皆さんの卒業式の後に行われた同窓会入会式で承認された幹事たちの集まりです。それぞれの生活の中で時間を割いて運営しています。今回の同窓会についても、より多くの卒業生に参加してもらい、楽しんでもらおうと運営に力を入れているところです。

今回の総会が第二回ということは第一回もあったわけですが、初めての総会は月岡温泉で開催しました。この時は交通の利便性に欠け、時期的にも九月と中途半端だったためか、参加者も思ったほどではありませんでした。内容はというと、同窓会幹事会の活動報告・金銭に関わる報告といった内容を総会でを行い、懇親会

では懐かしい面々との歓談に花を咲かせ終了となりました。

さて今回はというと、新潟駅に近い会場と敬和祭に絡めた日程設定としました。これで同窓会総会・懇親会に出席して仲間たちとふれあうと共に、敬和祭を機会に久しぶりの母校に足を踏み入れることが可能となりました。新発田・聖籠から離れて暮らしている卒業生も、発展し変化を続ける母校に帰る良い機会です。また、卒業生も大幅に増え、たくさんの参加者が予想されます。今年の学園祭は卒業生で学園を埋め尽くしましょう。

同窓会のもう一つの活動として、名簿の編纂業務があります。これは卒業生同士の連絡を取りやすくすることをその目的としています。卒業と同時に卒業生名簿を作成し、機関誌発送等の作業から始めて常時メンテナンスをしています。ゆくゆくは同窓会名簿を作成し皆さんに配付する予定です。今回の総会においても皆さんの情報を頂きながらメンテナンスを予定していますので、ぜひご協力下さい。

日時 一九九八年十一月八日(日)

会場 新潟東映ホテル

☎ 〇二五―二四四―七二〇一

日程 受付 午後一時～

総会 午後一時三十分～

懇親会 午後二時～四時

会費 七千円(総会のみ参加の場合は

無料です。)

クラブ紹介

男子

バスケットボール部

主将 岡田 功太郎

我々男子バスケットボール部は、選手二十名、マネージャー四名の計二十四名で活動しています。練習は月、木、金曜日の週三回、体育館でやっています。

我々の目標としては、「楽しくバスケットをする」のではなく、「試合に勝つバスケット」をするように練習をしています。どこの部も同じだと思いますが、指導してくれる人がいないので練習メニューは自分でまず考え、練習をしながら部員に聞き、直す所は直して、よりよい練習をしています。しかし我が部は出席が悪く、自分が考えている試合までの練習メニューが思うようにいきません。例えば基礎練習をして体力をつけ、試合形式の練習をしてチームメイトの動きを覚え、試合に臨むのが理想です。でもだいたい、試合が近づくと基礎練習をやらせず、すぐに試合形式の練習からはいります。そのため、試合でも体力の差がでたり、チーム内の雰囲気が悪くて負ける試合が多かったです。個人個人の技術は高いので、練習に参加すれば、けっこういいチームができると思います。三年生はあと二試合で引退です。三年生がぬけても一、二年生は練習をなまけず、試合では良いムードを作り、納得のいく勝利を収めてください。自分たちも最後まであきらめず頑張っていきたいと思っています。

「一九九八年度保護者との就職懇談会」報告

去る七月二十五日(土)、新潟市のホテルイタリヤ軒において、三年次生の保護者を対象に『一九九八年度保護者懇談会』を開催し、無事終了できましたことは、偏に後援会役員をはじめ、教職員各位のご支援の賜物と深く感謝致しております。この懇談会は三年次生の保護者の方々をお招きして、これから始まる厳しい就職活動をお子様と共に考えて頂きたいとの考えから開催されたものです。

当日は学長を始め教員二十三名と保護者七十余名の方々が参加致しました。第一部の次第は次のとおりです。

挨拶 学 長

北垣 宗治

講演「採用環境・選考方法の実態と就職に対する家族の支援策について」

(株)日本文化科学社 稲熊 清一氏
「本学における就職指導への取組みについて」

就職委員会委員長 斎藤 祐介

柴沼 晶子

就職課程委員会

石田 幸夫

就職相談室長

講演では、稲熊氏から就職協定廃止により、どのような現象が起きたかを踏まえた上で、これから始まる就職活動について以下のような説明がなされました。

九七年一月に就職協定が廃止されたことで、企業の採用活動に①早期化②長期化③多様化の三つの現象が起きた。①早期化により、結果的に複数内定を得る学生と全く

内定のもらえない学生とはっきりと分かれた。②長期化により、通年採用を行う企業が出てきて、採用試験を何回も行い、時間を掛けて自社に欲しい人材を探す時代に入った。③採用方法の多様化により、企業はより質の高い学生を確保するために、エントリーシートやグループディスカッションなどで、「自分の夢は何か」「入社してやりたいことは何か」といった自身自身のことについての質問が多くなってきた。

内定をもらえるか否かは、面接試験で「自己PR」がきちんとできるかどうかで決まる。つまり、企業は自分のことを知っている人間を採用したいと考えているからである。実際に何人かの落ちた学生と落ちた企業との話や、人事担当者との話を聞いてみると、ある共通点(つまり採用試験で落とされる学生にはそれなりの理由)があることが分かった。それは「自己分析」がしっかりとできていないかどうかである。

これからの時代は就職活動に対する家族の支援が不可欠であり、保護者の方々には「0点からのプラスの発想」と「共感的理解」とをお願いしたい。学生が「自分は何をしたいか」といった目的意識を持って就職活動を始めるために、保護者が一番身近な社会人の先輩として良き理解者となって頂きたい。

次に斎藤就職委員長から大学の就職支援体制としての「就職委員会」と「就職相談

室」の組織的位置付けと職務内容等について、柴沼就職課程委員からは教員採用試験の現状についてそれぞれ説明がなされました。また、石田就職相談室長からは、今年度の就職状況の説明がなされ、就職活動を実際に行うのは学生本人であり、①就職相談室としてはその支援のための就職先の確保や就職情報の提供を行っている、②この情報をもとに学生自身は積極的に動いてほしい、③就職相談室では県外の求人情報の収集には限界があることから、県外出身の学生には情報収集のために地元新聞社等の就職情報誌の申込みをお願いしたい、と強調しました。



若干の休憩を挟んで行われた第二部の懇親会は、石井富男後援会副会長の挨拶・乾杯の発声で始まり、三年次生の演習担当教員のほか就職委員と保護者の皆様との自由な懇談を通して、就職活動について十分に相談ができた有意義な一日でした。

これから迎える厳しい就職戦線に対し、大学としては一人でも多くの学生がより満足度の高い就職ができるように、万全を期すことは勿論、保護者の皆様からもより一層のご支援とご協力を頂きたいとお願いし、懇談会を閉幕致しました。

(就職委員会・就職相談室)

七月末日をもって菊地次郎さん(教務課長)と富所恵利子さん(教務課
入試室入試係)のお二人が退職されました。長い間、おつかれさまでした。

菊地課長の「退職に寄せて

総務課長 長澤雄介

菊地次郎課長は、一九八七年六月に開設された、敬和学園大学設立準備室の最初の職員であった。最初の業務は、文部省への申請で真っ先に問われる「学生確保の見通し」の一つである「大学が開学したら受験するか」と題したアンケート調査だった。新発田市、及び新潟市を中心とした高等学校を対象に行ったが、夏休み直前の日程的に非常に厳しい調査となった。しかし、この日程の厳しさは、その後の申請業務を省みると、ほんの序曲に過ぎなかった事となる。

このアンケート調査後の「学生確保の見通し」の書類作成と平行して、創設資金のための募金活動が開始された。学校法人では、この募金の目標額が得られるよう、企業からの寄付金が全額損金算入できる「受配者指定寄付金」の認可を受けるため、日本私学振興財団(当時)へ認可申請を行う事にした。しかし、このためには、新潟県の「寄附行為変更認可」を必要とし、文部省への申請が、順調に進んでいることが条件であった。その上日本私学振興財団も大学の新設のための「受配者指定寄付金」の認可が初めてだった事で、この認可申請は言葉では表現できないほどの苦難の道であった。菊地課長は、この一連の申請業務をほとんど一人でこなしした事になる。

その後は、カリキュラム編成、及び教員組織を中心とした「設置認可申請」(もう一方には「寄附行為変更認可申請」がある)を担当された。

一九九一年四月の開学後は教務課長として若い職員を丁寧指導された。一九九五年の完成年度後からは、「老兵は早く消え去るべきである」と機会あるごとに言われていた。しかし、本学にとって、どうしても「なくてはならない人」と言う事で、本年度までお願いしてきたが、「高齢ということから、誠に残念ではあるが、7月末をもって退職される事となった。

菊地さんが学長予定者から、大学設立準備室の職員にと要請された時、学長予定者から「炬燵に入っていてもできる仕事だから」と口説かれた事は、本学事務職員の中では語り種になっている。しかし、新潟大学のいくつかの学部の事務長を歴任され、定年を迎えた後に従事される業務としては、あまりにも激務であったと言わざるを得ない。これからはお体を大切に、好きな囲碁を打ちながら、十一年間にわたる敬和での疲れを癒す事ができるよう祈っている。

敬和学園大学で学んだこと

富所恵利子

私が敬和学園大学に職員としてお世話になるときに「あなたは敬和学園大学で何をしたいですか」と尋ねられ、実際に講義を受講できるとの思いもあり、私は「学生とともに学びたいと思います。」と答えました。では、開学二年目の一九九二年四

月から敬和学園大学で過ごした六年四カ月の間に学生のみなさんと机を並べて講義を受講したかという、チャンスがあったにもかかわらず、残念ながらそれを生かすことはありませんでした。その点だけを考えれば、「学生とともに学ぶ」ということを実行せずに過ごしてしまったわけです。

しかし、担当の職務では学生とのコミュニケーションの機会が非常に限られていましたが、そのわずかな機会の中で学生に気づかされることができました。敬和学園大学の学風がびったりと思っただけで入学した学生。自らの意志でボランティア活動をする学生。与えられた勉強をするのではなく、関心を持ったことを探究する学生。目標に向かって努力する学生。様々なことにチャレンジする学生。というように、敬和学園大学には前向きな姿勢の学生が多いように思います。彼らは、机に向かって書物を読むという方法だけではなく、様々な方法で自ら学んでいます。私は彼らの学ぶ姿勢を知ることによって、「学生とともに学ぶ」ことができたのではないかと思います。

学ぶ機会が学生時代だけではなく、いつでも、どこにでもあります。常に何かを得たいという意識を持つことや、様々なことに興味を持つことが学ぶということに結びつくのではないのでしょうか。教学の当事者ではないけれども、最も近い場所にいる大学職員として過ごせたことによって、あらためて学ぶことについて考えることができたと思います。これからも、学ぶという意識を持ち続けたいと思います。

おつかれさまでした

オープンキャンパス

を終えて

入試室主幹 西村 秀雄

さる八月一日(土)、晴天に恵まれて水銀柱がぐんぐん上昇する中、オープンキャンパス(第一回)が実施されました。

六十一名の参加者はまずいくつかのグループに分かれて、本学学生の案内で学内の施設・設備を見学しました。

北垣学長の御挨拶に続いて、ブロンデ先生とプリハン先生とによる外国語(英語)の体験模擬授業、大学・入試相談会、在学生によるなんでも相談会およびサークル紹介が同時に並行して開かれ、参加者は関心に応じたプログラムに参加しました。本学が英語を中心とする外国語教育に力を入れていることは広く知られていますので、ま

ず模擬授業を体験し、続いてサークル紹介に参加される方が多かったです。

オープンキャンパスが無事に終了できたのは参加された教職員、学生の皆さんのおかげです。この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

◆学事予告

- 十一月 七日 敬和祭(～八日まで)
- 十三日 リトリート(～十四日まで)
- 十二月 十八日 クリスマス行事
- 二十四日 冬期休暇(～一月七日まで)
- 一月 四日 集中講義期間(～七日まで)
- 八日 講義再開/国際文化学科卒業論文提出締切日
- 十一日 英語英米文学科卒業論文提出締切日

《寄付者ご芳名》

- 一 般 藤倉 庄平
 - 一九九五組 飯沼 正志② 塩谷 真澄 長谷川 知
 - 一九九六組 村山 依子
 - 一九九七組 吳 賢欄 奈良橋健太郎 栗栖 仲次 鈴木美智子
 - 押川 雄一 金子美由紀 二宮 慶子
 - 一九九八組 高橋健太郎 小沼 義敬 佐藤 浩雄 中野 貴之
- (敬称略)

前号以降の報告

軟式野球部は新潟地区春季大学軟式野球リーグにて順調に勝ち進み、決勝戦まで進むことができましたが、残念ながら全国大会のキップを得ることはできませんでした。部員達もかなり落ち込んでいましたが、今後は気持ちを切り換え、秋季リーグの優勝を目指し、日々精進していきたいと思

(軟式野球部主将)

～お詫びと訂正～

前号(第十五号)に掲載された中村義実先生の新任教員自己紹介(p.4)の冒頭において、「英語教師を血となり…」とあるのは、「英語教育を血となり…」の誤植でした。先生にご迷惑をおかけしましたことをお詫びして、訂正いたします。

..... 1999年度入学試験日程

■募集学部・学科および定員

学 部	学 科	定 員
人 文 学 部 (昼間・男女共学)	英語英米文学科	100名
	国際文化学科	100名
合 計		200名

■入試日程・入試区分別募集人員

入試区分	募集人員	出願期間	試験日	試験会場	試験科目・配点	
推薦	各学科 45名	11月4日(水) ～11月14日(土)	11月22日(日)	本 学	小論文100点、面接50点、 調査書100点、 特別活動等10点(上限)	
一 般 入 試	A 日程 2科目型	各学科 25名	1月8日(金) ～1月22日(金)	2月1日(月)	本学、新潟、 長岡、東京	英語100点、国語100点、 調査書100点
	B 日程 1科目型	各学科 15名	1月8日(金) ～1月22日(金)	2月2日(火)	新 潟	英語、国語より1科目 200点、調査書100点
	C 日程 課題面接型	各学科 5名	2月19日(金) ～3月5日(金)	3月13日(土)	本 学	面接100点、調査書100点
	センター入試	各学科 10名	1月8日(金) ～1月22日(金)	1月16日(土) 1月17日(日)		英語200点、国語、地歴、 公民の11科目より1科目 200点、調査書100点
編 入 学	若干名	10月6日(火) ～10月16日(金)	10月24日(土)	本 学	小論文、面接	
帰 国 子 女	若干名	11月4日(水) ～11月14日(土)	11月22日(日)	本 学	小論文、面接	
社 会 人	若干名	11月4日(水) ～11月14日(土)	11月22日(日)	本 学	小論文、面接	
外国人留学生	若干名	11月18日(水) ～12月2日(水)	1月23日(土)	本 学	小論文、面接、日本語能 力試験1級または2級	

キャンパス日誌

7月

- 1日 新発田市主催 本学見学会 (27名来学)
教授会
- 2日 学園常務委員会
- 3日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑫
講師 春名康範 新潟教会牧師
「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」
- 4日 留学生との出会いの集い
- 8日 敬和フォーラム
講師 S.ゴールドSTEIN 教授
「短歌ワーク・ショップ」
- 10日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑬
講師 北垣宗治学長「兼好法師父子問答」・
ソウル神学大学教会音楽科カペラ合唱団
- 14日 新発田地域高等教育推進協議会主催
市内小・中・高教諭視察
前期講義終了
- 15日 補講日 (～16日まで)
短期留学 (アメリカ、ノースウェスタン大学)
1名参加 (～8月19日まで)
- 17日 前期末試験 (～24日まで)
- 21日 韓国東国大学校日本語講座開講 (～31日まで)
理事会



◀7/21 韓国東国大学校
日本語講座開講式

- 25日 保護者との就職懇談会
夏期休暇 (～9月24日まで)
短期留学 (アメリカ、サンパナティーン校)
11名参加 (～8月28日まで)



◀7/25 短期留学(アメリカ、
サンパナティーン校)

- 26日 短期留学 (イギリス、アングロ・コンチネンタル)
3名参加 (～8月31日まで)
- 27日 集中講義期間 (～28日まで)
キャンパスクリーンアップ

8月

- 1日 オープンキャンパス (第1回)
事務職員人事異動発令
- 7日 職員研修旅行 会津大学視察



◀8/7 職員研修旅行 会津大学視察

- 27日 新発田祭り「民謡流し」参加
- 29日 事務職員採用試験 (1次)

9月

- 2日 前期追試験 (～4日まで)
- 3日 学園常務委員会
- 7日 集中講義期間 (～11日まで)
- 12日 オープンキャンパス (第2回)
事務職員採用試験 (2次)
- 18日 公開講座(新発田) (第1回)
講師 北垣宗治学長「文学における知の探求」
- 19日 福祉体験学習週間 (～24日まで)
- 24日 敬和ふれあいバラエティー
- 25日 後期講義開始
公開講座(新発田) (第2回)
講師 矢嶋直規 専任講師「環境と倫理」
理事会



◀9/25 公開講座(新発田) (第2回)

10月

- 2日 公開講座(新発田) (第3回)
講師 菅野 浩 教授
「21世紀の地球環境を考える」